

演題名 頭部 MRI における構造化入力レポート

演者名・演者所属

横井英人（香川大学医学部附属病院 医療情報部）

尾藤茂（シーフィックソフトウェア）

竹居和子（シーフィックソフトウェア）

原量宏（香川大学医学部附属病院 医療情報部）

近年、CT の多列化に伴う空間分解能・時間分解能の上昇や、3 テスラ MRI や拡散強調画像による組織診断能力の向上など、画像診断機器の技術開発の進歩により新たな検査項目や診断技術が生まれており、画像診断への要求は従前にも増して高まっている。

電子カルテやオーダーリングを始めとし、RIS、PACS、レポートニングシステムの導入も広がりつつある。

画像診断にはレポートが不可欠であるが、例えば同じ頭部 MRI 画像でも依頼科の医師により視点に大きな違いがある。脳神経外科では病変が外科的治療の対象である場合が多いのに対し、神経内科では病因論的な観点が重視されることも少なくない。

また、検査機器と部位・臓器の組合せにおいて、それぞれの診断能は大きく違い、同一部位について、ある検査機器で検出ができて他では検出できないこともある。したがって各シチュエーションによって使用される所見や診断の用語に差異が生じる。もちろん、同一検査機器の検査プロトコルの違いも診断能の違いにつながる。

このような背景に於ける所見・診断用語の多様性に対して、放射線の画像診断レポートは、フリーテキストによる入力が一般的であり、いかに迅速に入力を行えるかという側面に焦点を当てて発展してきた。しかし自由文からのデータマイニングには限界があり、データの後利用は困難なものとなっている。

筆者らは、内視鏡や超音波のレポートコンテンツをいくつか作成してきたが、用語の統一や構造化がされていない中でレポートコンテンツを作成するには大変な労力が必要であった。

今回、頭部 MRI を例に種々の教科書から用語整理を行い、構造化レポートコンテンツを試作したので報告する。